

インドネシアの神・神々・カミ

文化現象に現れる宗教的次元
第4回



東京外国語大学言語文化学部
インドネシア語専攻 青山 亨

この講義のねらい

- インドネシアにおける「神」の現れ方の3類型
 1. 世界宗教イスラームに代表される「唯一神」
 2. バリにおけるヒンドゥー教の「神々」
 3. 地方の信仰に見られる精霊信仰における「カミ」
- これらの類型が、交わることのない存在の場にあるのではなく、関連した存在の場に重層的にあることを明らかにする

この講義の構成

- 神の概念を整理する
- ↓
- インドネシアの地理的広がりや文化的多様性を理解する
- ↓
- インドネシアの歴史から多様性の根拠を理解する
- ↓
- **インドネシアの諸民族における「神」のさまざまな現れ方を見る**

神の概念～民俗学的理解～

- 本居宣長
 - 古代の迦微(カミ)とは「尋常(ヨソネ)ならずすぐれたる徳(コト)のありて可畏(カシコキ)き物」(古事記伝)
- 自然神・人格神を含む八百万のカミガミ
 - 「チ」(イカヅチ、オロチ)、「ミ」(ワタツミ、ヤマツミ)、「タマ」(オホクニタマ)、「ヌシ」(オホモノヌシ)など
- 漢字「神」=訓読み「カミ」
 - カミ概念は「神」に統合(上記の本居「迦微」)
- 古代社会のまつりごと(祭祀・政治)
 - カミを鎮め奉ることによって災厄を回避し、社会に福利をもたらす

神の概念～民俗学的理解～

- 人とカミの連続性
 - カミの祖先神化と人間の神格化: 藤原氏(春日大社)、菅原道真(北野天神)、徳川家康(東照大権現)
- 本地垂迹: 本質と仮の現れ(権現)の関係
 - 大日如来(本地)と天照大神(垂迹)
- キリスト教
 - ザビエル「大日を拝め」⇒「提字子(Deus)」。「きりしたんの教えに、でうすと申す大仏、天地の主にして、万、自由の一仏有り。是即天地万有の作者なり。」
- 明治以降、「神」が「God」の定訳

神の概念～人類学的理解～

- タイラー(E.B.Tyler)のアニミズム説
 - アニミズム>霊魂(soul)>精霊(spirit)>神(god)>多神教>一神教、進化論的視点
- アニミズム「霊的なもの(spiritual being)の信仰」
 - 霊魂(個人における「霊的な存在」)
 - 精霊と神の区別は困難。創世神話で活躍する存在としての神。人間の認知しうる現実世界の限られた領域で活動する存在としての精霊。
- シャーマニズム
 - 「通常トランスのような異常心理状態において、超自然的存在(神、精霊、死霊など)と直接接触・交流し、この過程で予言、託宣、ト占、治病行為などの役割をはたす人物(霊媒・シャーマン)を中心とする呪術・宗教的形態」
 - トランスには、エクスタシー(脱魂)とポゼッション(憑霊)の2形態がある。

神の概念～人類学的理解～

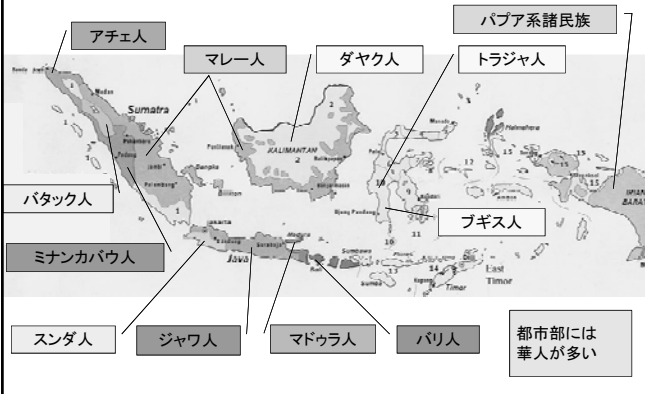
- インドネシアにおける「神」概念
 - マレー語、サンスクリット、アラビア語起源の概念が重層的・共存的に使用されている
- 神 (God)
 - Tuhan: 「主」キリスト教・イスラームの文脈<マレー語>
 - Allah (「神」、イスラーム・キリスト教の文脈<アラビア語>
- 神々 (gods)
 - deva: 「神」ヒンドゥー教の文脈<サンスクリット、batara: 「神」ヒンドゥー教の文脈<サンスクリット、sang hyang/sang yang: 「神」バリ社会<ジャワ語・バリ語
- カミガミ (spirits)
 - hantu: 「幽霊」<マレー語、jin: 「精霊」「魔霊」<アラビア語、roh: 「靈魂」<アラビア語、semangat: 「靈魂」<マレー語、jiwa: 「靈魂」<サンスクリット

インドネシア概要

- インドネシア共和国 (1945年8月17日独立)
- 面積 191万km² (日本の約5倍)、34州
 - 約18,000の島々、東西5,000km以上
- 人口 2億4000万人 (世界第4位)
 - ジャワ人、スンダ人など300以上の民族

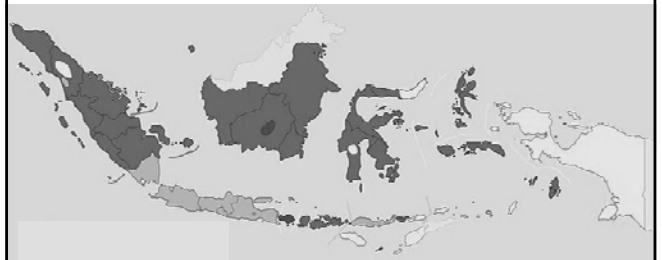


インドネシアの主要民族の分布



宗教の分布

- イスラーム 87%、
- プロテスタント 5%、■ カトリック 3%、
- ヒンドゥー教 2%、■ 仏教 1%



パンチャシラ (国家五原則)

1. 唯一神への信仰
2. 公平で文化的な人道主義
3. インドネシアの統一
4. 協議と代議制に内在する叡智に導かれる民主主義
5. インドネシア全人民に対する社会正義



ガルダ・パンチャシラ - Wikipedia

歴史的背景

- 5世紀～15世紀: インド文明の影響
 - 大乘仏教 (ボロブドゥール寺院)
 - ヒンドゥー教 (プランバナン寺院)
 - ジャワ島を中心に定着、バリ島へも
- 15・16世紀: イスラームの本格的な定着開始
 - 海上交易の拠点 > 沿岸部から浸透
 - 16世紀ジャワ島、マタラム王朝、スルタン
- 16世紀: キリスト教の到来
 - 香料諸島への関心 > 東部インドネシアに展開
 - 19・20世紀に内陸部の布教に一定の成功

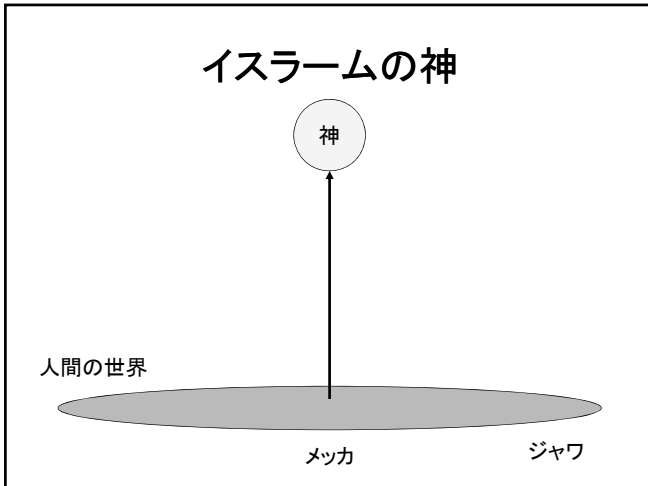
イスラーム

- 六信:
 - 1) アッラー、2) 天使、3) 啓典、4) 預言者(ムハンマド)、5) 来世、6) 天命
- 五行:
 - 1) 信仰告白、2) 礼拝(1日5回)、3) 断食、4) 喜捨、5) 巡礼
- イスラーム暦(ヒジュラ暦)
 - 純太陰暦: 西暦2013年=ヒジュラ暦1434/1435年
 - 断食月(ヒジュラ暦第9月)、断食明け祭日(ルバラン)の朝に集団礼拝

正統的信仰

- 神は、一切を超越した唯一の絶対者、世界の創造主、終末の裁き主
- 神のみが祈りの対象

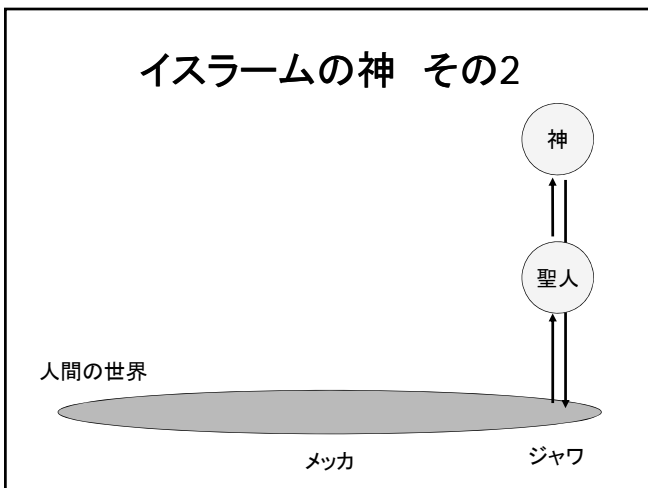
イスラームの神



イスラームの現地化(localization)

- 聖者信仰
 - ワリ・ソング<wali(聖者)+songo(九)>
 - 15世紀末~16世紀初、ジャワ島においてイスラーム布教に従事した九人の聖者
 - 聖人廟への巡礼
- 土着的伝統の受容
 - 死者への祈祷
 - 人形影絵芝居(ヒンドゥーの神々が登場)の容認

イスラームの神 その2



ジャワの宮廷儀礼 1

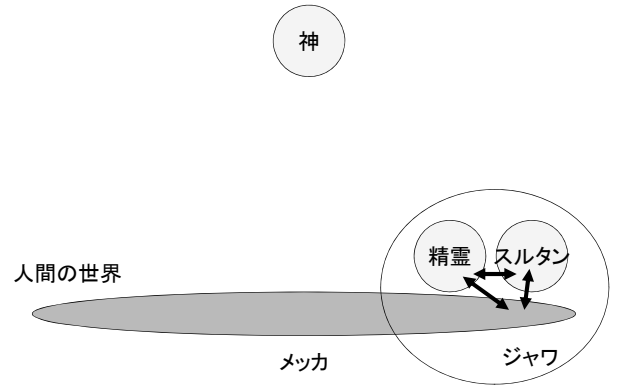
- ジョグジャカルタの王
 - スルタン(Sultan): イスラーム地域社会の世俗的権力者
 - マタラム王朝の末裔
- ガルブググ(Garebeg)
 - ムハンマドの誕生日(第3月)
 - 断食月明け(第10月)
 - 犠牲祭(第12月)
- グヌンガン
 - ガルブググ祭礼のハイライト
 - 山型の食べ物のみこし> 民衆に配布
 - 豊穡儀礼



ジャワの宮廷儀礼 2

- 新年儀礼
 - イスラム暦正月
 - イスラム暦=ジャワ暦(マタラム王朝期に改暦)
- パラントウリティス
 - ジョグジャカルタ南方のインド洋に面した海岸
 - スルタン王宮の供物を海に奉納
 - 聖なる岩「パラクスモ」
 - 南海の女王ラトゥ・キドウルへの奉納と瞑想

イスラームの神 その3



精霊信仰におけるカミ

- ラトゥ・キドウル(ジャワ)
- スラマタン(ジャワ)
- 稲収穫儀礼(ジャワ)
- イバン人の信仰(カリマンタン)

ラトゥ・キドウル

- ラトゥ・キドウル「南海の女王」
 - ラトゥ(ratu) = 女王
 - キドウル(kidul) = 南
 - ジャワ島南海岸部を中心に広く信仰
 - 南海(インド洋)にあって、ジャワ全土の精霊たちを支配
- マタラム王朝との関係
 - 王朝の創建者セノパティと交流
 - マタラム王朝の子孫とも交流を継続

ブドヨ・クタワン

- ジャワ宮廷舞踊
 - ブドヨ・クタワン(bedhoyo ketawang)
 - スラカルタ、ススフナン王宮。マタラム王朝の末裔
 - 神聖舞踊、王の即位記念日
 - ガムラン伴奏
 - 九人の女性による集団舞踊
- ラトゥ・キドウルの出現

ラトゥ・キドウルへの供物

- 東ジャワ州、グリユップ村の事例
- ラトゥ・キドウルへの奉獻
 - レヨグ(reyog)踊り
 - インド洋への供物

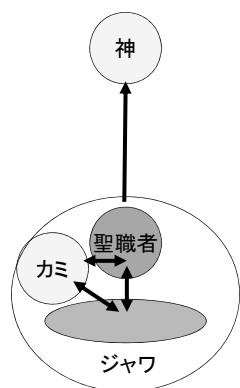
スラマタン

- スラマタン (selamatan)
 - スラマタン < selamat アラビア語「安寧」
 - 共同体の構成員(精霊を含む)による共食儀礼
- ブルシ・デサ (bersih desa)
 - 村落共同体の「清めの儀礼」
 - 年に1回、通例、収穫の後
 - アッラーに対する感謝、祖先・村開祖への敬意、アッラーと使徒に対して村の安寧を祈願
 - スラマタン(共食儀礼)

稲収穫儀礼

- デウィ・スリ(稲の女神)の信仰
 - デウィ < サンスクリット devī (女神)
 - スリ < サンスクリット Sri (吉祥の女神)
- 稲穂にデウィ・スリが宿る
 - 初穂をアニアニで穂刈りし、女神の形に作って供養する

精霊信仰 その1



イバン人の信仰

- イバン人 (Iban)
 - 別称「海ダヤク (Dayak)」
- ボルネオ島西部に約40万人
 - インドネシア・西カリマンタン州 20%
 - マレーシア・サラワク州 80%
- 主として陸稲焼畑農耕に従事
- 高床式長大家屋 (long house) = 集落単位
- インド化を経験せず、イスラーム化を拒否。
- 典型的なアニミズム的世界観

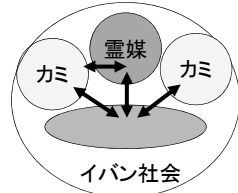
イバン人の世界観

- 可視世界 対 不可視世界
 - 超自然的、霊的、超越的世界
- antu (精霊)
 - インドネシア語 hantu (幽霊)
 - 尋常の理解を超えた不可思議な存在
- petar (精霊)
 - antuのうち人間に好意的な性質を持った存在

イバン人の世界観

- gawai (祭礼)
 - petarに対する祈願、供物の奉獻
 - 特定のpetarに対して特定のgawai
 - 例: singalang burongへのgawai burong
- manang (シャーマン、霊媒)
 - 邪悪なantuと交渉し、そのメッセージを解読し、災いを除去
 - 身体から自らの靈魂 (semangat)を解放し、霊界に参入

精霊信仰 その2



ヒンドウーの神々

- インド文化の伝来
 - 5世紀以降
 - ジャワ島を中心にヒンドウー教、大乘仏教の伝来
- ヒンドウーの神々
 - ブラフマー神(Brahma): 宇宙創造の神
 - ヴィシュヌ神(Visnu): 宇宙維持の神
 - シヴァ神(Siva): 宇宙破壊の神
 - そのほかにガネーシャなど多数

ラーマーヤナの浮き彫り

- プランバナナ寺院(Prambanan)
 - 9世紀頃、ヒンドウー系王国の建立
 - 中部ジャワ、ジョグジャカルタの東15km
 - シヴァ神祠堂を中心に、ヴィシュヌ神祠堂、ブラフマー神祠堂が南北に直列
 - シヴァ神祠堂の回廊にラーマーヤナの浮き彫り
- ラーマーヤナ(Ramayana) 物語
 - ヒンドウー教叙事詩の代表作
 - ヴィシュヌ神の転生ラーマ王子が悪鬼に誘拐されたシータ王女を救出する

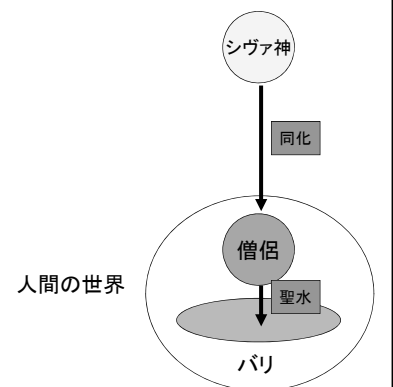
ワヤン・クリ

- ワヤン・クリ「人形影絵芝居」
 - ワヤン(wayang)「影」
 - クリ(kulit)「皮」
 - ダラン(dalang、人形使い)、ガムラン伴奏
- 物語
 - 主として、ラーマーヤナ、マハーバーラタに代表されるヒンドウー叙事詩に題材を得た作品
 - ラーマ、シータ、シヴァ神などが登場

バリ島の信仰

- ヒンドウー教の伝来
 - 11世紀以降、インド化したジャワの政治的・文化的影響下
 - 1343年、ジャワのマジャパヒト王国の支配下
- シヴァ神を崇拝する僧の儀礼
 - シヴァ神と同化し、聖水を作る
 - 信徒に聖水を散布
- ブサキ寺院が中心寺院、各村落に寺院(プラ)
 - オダラン(odalan): 寺院創立記念祭
 - 210日周期、神々の降臨

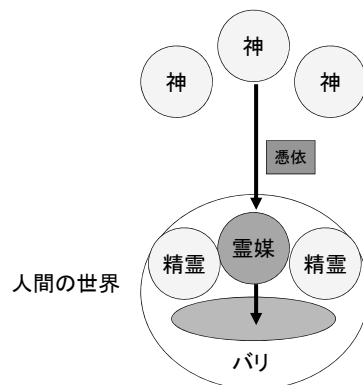
ヒンドウーの神々 その1



サン・ヒャン・ドウダリ

- サン・ヒャン・ドウダリ
 - サン<古ジャワ語Sang「神聖なるもの」
 - ヒャン<古ジャワ語Hyang「神」
 - ドウダリ<サンスクリットVidyadhari「天女」
- 初潮前の少女二人がトランス(神懸かり)の状態になり、男の肩に跨って踊る
- ドウダリの言葉を語る
- 現在のレゴン舞踊の原型と目される

ヒンドウーの神々 その2

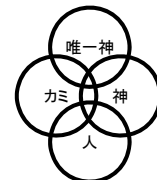


バロン舞踊

- バロン舞踊
 - バロンBarong 善を象徴する聖獣
 - ランダRangda 悪を象徴する魔女
 - 悪霊leyak達の支配者
- バロン対ランダの永遠の戦い
- クリス(短剣)を持ってバロンを助ける村人
- 僧による聖水の散布
- ランダと同一視される魔女チャロン・アラン
- シヴァ神の妃ドゥルガー女神を崇拝

おわりに

- イスラームにおける唯一神
- 精霊信仰におけるカミ
- ヒンドウーの神々
- 唯一神とカミ、神々とカミの共存
- 「神」の出現=聖なる物との交流
- 精霊信仰の基層



【設問1】

この講義では、神(God)、神々(gods)、カミ(精霊)といった存在に対する人間の認識が互いに重なりあうものであることを、インドネシアの例を取って示しました。このことを、自分なりに整理して説明してください。

【別紙に回答してください】

【設問2】

この講義を受ける前と後では、あなたが「神(かみ)」という言葉に対して抱いていた考え方がどのように変わりましたか？変わりませんでしたか？変わったらどのように変わったのでしょうか？説明して下さい。また、もしあれば、コメント・質問も書いてください。

【別紙に回答してください】